

初

潮

ひそかに我が邦の歌の道を考ふるに、八雲立つ  
の神詠よりこのかた、たゞ三十一音一章の歌の  
み長く行はれて、人々の心の種、それらの花を  
開き、世々の姿のさまざまには移り變りたれど、  
終に廢たること無くして今に及べり。三十一  
音より長き歌は、五首の神語カムゴト二首の夷曲ヒナブクをはじ  
めとして、其の體今に傳はり残りたれど、古今集  
の頃より夙く衰へ初めて、今は深く古へぶりを  
尙み學ぶ人のほかは、之をもてあそぶものほと  
ほと無し。樂に合はせて歌ふ四句四十八音の

今様歌は、中古より世に出でたれど、歌はるゝ事を離れては、はかばかしくも行はれて熄みたり。其の他、旋頭歌の如き、うたひものゝ歌の如き、さくゝの歌の體無きにはあらねど、皆いづれも人にもてはやさるゝ事無くして、たゞひとり三十一音一章の歌のみ、とこしへに盛んに行はれ、柴刈る翁、絲繰る媪までも、歌とし云へば、たゞちに五七五七七と言葉をあやどりて作れるものを指して云ふぞと心得たるほどになれり。こは我が邦人の心直く美はしくして、古を尙み、み

やびを好むことの篤さが爲なるべけれど、また一つには、三十一音の歌の體、我が邦人の言語と性情とに克く諧ひ應ずるところあるが爲なるべし。此の事まことに深く喜びつべく、此の事まことに深く思ふべきなり。

酒折の宮の一夜の間答より、筑波根の端山、繁山事繁くなりて、連歌の道興り、連歌よりまた俳諧、連歌起りしが、後に其の發句をのみ作りて之を俳句と唱へ、世の多くの人のいたくもてはやすに及びては、其の體は五七五の十七音にして、三

十一音の歌の末の句足らぬほどのいと短きものながら、其の實は三十一音の歌の外におのづからにして新たに湧き出でたる一つの歌の如くに思ひなされるに至れり。此の俳句の大に行はるゝに至りたる所以は、古き歌と新しき人との間に、いと大きな距離ヘタタリの出で来て、人のこれを超えんことを物憂く思ひ初めしよりなり。年月を経ぬる中に、人の心ばせ言葉づかひもやうく變り行けるに、歌のみは猶古めかしう詠み出づるにあらねば歌ならぬやう、我も思

ひ、人も思へるまゝ、おのづと之を難しとして詠み出づること無くなり、またたまくと人の詠み出でし歌を聞きて、古への言葉は今の耳に疎く、言ひ古したる意は新しき胸に響くこと稀なれば、さらにおもしろしとせざるに至り、人と歌との間は、もとより近くもまた近くして有るべきに、遠くもまた遠く距たれるやうになりたり。歌の道の教には古きを尙ぶなり、世の亂れの打ち續きて物事は皆昔に似ざるやうになりしなり、此の二つの事全く相反きて相容るゝ能



はざりしなれば、歌と人との相距たりしも已むを得ざりしなるが、人の歌を好むの心はさてしも滅ぶべきにあらねば、一度耳近き詞をもて思のまゝに詠み出づる俳句といふものを得るに及びては、喜び悦びて愛てくつがへらざるを得ざりしなるべし。かくて俳句の其の始めは、一首の歌の本のみの戯れたるものなりしが、後には戯れたるのみのものにはあらぬ、我が邦の一つの體の歌とはなれるなり。俳句はまことに十七音の歌なり。我が邦に於ける最も力ある

一つの體の歌なり。江戸の時、我が邦に一つの歌の體の加はりたりし此の事、まことに深く悦びつべく、又まことに深く思ふべきなり。我が邦人の古くより西の方の國々と行き通ひするや、よろづの事彼の國の手振りを學びたること甚だ多く、特に文字さへも彼の邦のを取りて用ひたるほどなれば、志賀の都の頃よりして全く彼の國の詩を學びて作りし人出て來、時によりて或は盛んに行はれ、或は衰へしが、今に及びて猶其の響に倣ふもの甚だ少からず。さら

ぬだに長歌の道は夙くより隠れて、多く事を叙  
べ、深く思をつらぬるに宜しき歌の體は、有れど  
も無きに近くなりしに、まして江戸の時に至り  
ては、三十一音の歌さへほとく外つ國のもの  
と同じやうに我にも手易からず、人にも耳遠き  
ものとなり果てしかば、漢土の文字讀み學ぶ事  
の廣く行はれたるにつけ、むしろ彼の國の詩を  
作りたるかた、其の語は富み其の體様は多くし  
て、よろづに利便多く、おのづからおもしろくも  
作り得べしと思ひてか、才ある人の我が邦に生

れながら我が邦の歌を作らて、彼の邦の法に隨  
ひ彼の邦の詩を作れるもいと多し。此の事の  
喜ぶべきやあらぬやは措きて、我が邦の歌の道  
の上に就きて考ふるものは、我が邦人の才ある  
もの、我が邦ぶりの歌を棄て、よその國の歌  
を作りしといふいと大きな事に就きて、必ず  
深く思を致すべきならずや。  
戯れたる事を旨とする三十一音の狂歌、十七音  
の狂句、漢の詩を學びたる和詩、うたひもの、二  
十六音の歌などは、皆深く道ふに足らず。たゞ

幾重にも我が邦の歌の道を考ふるにつけて忘  
るまじきは、我が邦には三十一音の歌と、十七音  
の歌と、我が邦の言葉もて綴られざりし歌との、  
長く傳はり廣く行はれしこと是なり。

古き壺は猶新しき酒を盛り得べし。さてしも  
今の人は猶三十一音の歌を詠み出づるなり。  
朽ちたる網のやゝ大きなるよりは、新しき網の  
やゝ小さなるかた、魚を捕へんには却つて頼も  
しかるべし。かくて古き言葉づかひの危げな  
らずして、新しき言葉づかひの心安きをたよれ

る十七音の歌は行はれ出したるなり。  
草木はたゞ日の温たかみある方に枝を伸ばし  
花を著けて、人と我との境の垣をも踰ゆるなり。  
人は我が身を緊しく締むるやうなる鎧の、しか  
も見る目美はしからぬを著んよりは、身のうご  
きの我が心に任せて、しかも見る目美はしき飾  
りなどの多き鎧を著けて、おのが武者ぶりをも  
よくし、思ふがまゝに立ち働きて手柄せんこと  
を希ふなり。我が邦人の中のあるものは、かく  
て好みて漢詩を作りしなり。

我が邦開けてより今に至るまでの歌の道の上を考ふるに是の如し。三十一音の歌、十七音の歌、漢詩の三つは、まことに多くの我が邦人の爲に、手にせられ、口にせられ、耳にせられ、胸にせられたる歌なり。

三十一音の歌は眞に好し。されど正しく言ふときは、三十一音の歌たるに叶ふものを得て歌とせられたる時まことに好きなり。太刀はまことに好し。されど正しく言ふときは、太刀の用ひらるべき場に用ひられたる折、太刀はまこ

とによるしきなり。十七音の歌を三十一音の歌に比ぶれば、ほとんど其の半のみ。されど十七音の歌たるに叶ふものを得て十七音の歌となり居る其の歌の場に三十一音の歌を立たしめんには、三十一音の歌はたしかに十七音の歌に及ばざるべし。太刀は好しといへども、引組みて闘ふときには、其の利馬手差に及ばざるが如し。三十一音の歌は三十一音の歌たるに叶ふものを得て歌とせられたる時好きなり。十七音の歌もまた然り。十七音の歌たるに叶

ふものを得て歌とせられたるときは上も無く  
好けれども三十一音の歌たるに叶ふものを十  
七音の歌にて言ひ果せんことは難し。馬手差  
は馬手差の用ひらるべき時に用ひられて甚だ  
利あり。太刀打せんには太刀に及ばざること  
遠きなり。

よろづの物其の性に叶ひて其の身あり其の身  
に叶ひて其の性あり。これ所謂自然にして奪  
ふべからざるものなり。蛇には蛇の性あり身  
あり蟹には蟹の性あり身あり。蛇の足無くし

て縦に行く蟹の脚多くして横に行く皆其の性  
と身と相叶ひて宜しきなり。蟹の足多きは可  
蛇に足を添へしめんは不可蛇の足無きは可蟹  
に足無からしめんは不可。たゞ當に物をして  
其の性と其の身と互に相隨ひ相叶はしめ強ひ  
て其の自然に戻ることに無からしむべき也。蟹  
の性をして蟹の身に宿らしめ蛇の性をして蛇  
の性を寓せしめよ。これ所謂大なるまこと也。  
所謂自然にして奪ふべからざるものなり。  
歌の道もまた然り。其の内容と其の外形とは

必ず應に相叶ふべきなり、相叶はしめざるべからざるなり、相叶はざらしむべからざる也。三十一音の歌たるに叶ふべき内容をして三十一音の外形を有せしめよ。十七音の歌たるに叶ふべき内容をして十七音の外形を有せしめよ。三十一音の歌には三十一音の歌たるに叶ふべき内容あらしめ、十七音の歌には十七音の歌たるに叶ふべき内容あらしめよ。蟹をして足無からしめんとするも非なり、蛇をして足多からしめんとするも非なり。強ひること勿れ、強ひ

るはいつはるなり。

強ひること勿れ、強ひるはいつはるなり。世にまことに十七音の歌ならてはといふ歌あるなり。強ひて之を三十一音の歌とする時は、たとへば一盞の葡萄酒にまた一盞の水を加へたるが如し。其の中の葡萄酒の量は同じかるべけれども、味はいたく異なるべし。又世にまことに三十一音の歌ならてはといふ歌あるなり。強ひて之を十七音の歌とする時は、たとへば二椀ほどの量の味噌汁を一椀の量に煎詰めたる

が如し。椀の中のものすべて異ならずといへども、味は猶いたく劣るべし。そもそもの物のまことの味は、一滴の水をも増すべからず、一滴の水をも減すべからざるのところに存するにあらずや。さればたま／＼十七音の歌を能くする餘りに、いかなる折にも十七音の歌にて足れりと思ふは、蛇の足無きに誇りて、蟹の足多からては叶はぬところあるを知らぬが如し。また三十一音の歌を好める餘りに、如何なる折にも三十一音

の歌にても言ひ果すべしと思へるは、蟹の足多きに誇りて、蛇に足無きにあらでは叶はぬところあるを知らぬが如し。いづれも皆非なり。しかのみならず、世の無足より多足に至るところのもの、蛇蟹に止まらず、禽の二足なる、獸の四足なる、蜘蛛の八足なる、蜈蚣の四十二足なるが如き、又同じく二足にして、鶴鶴の長き、鳧鴨の短きあるが如き、千殊萬異、皆各々其の性あり、其の身ありて、彼も此たる能はず、此も彼たる能はざるあるなり。歌の數音より數十音數百千萬音

に至り、數句より數十句數百千萬句に至るまで、  
苟も眞の生命ある歌は、皆各々其の外形に適應  
せる其の内容あり、其の内容に適應せる其の外  
形あり、彼も此たる能はず、此も彼たる能はざる  
べき也。此故に三十一音の歌は三十一音の歌  
にて可なるなり、十七音の歌は十七音の歌にて  
可なるなり、二十字の詩は二十字の詩にて可な  
るなり、二十八字の詩は二十八字の詩にて可な  
る也。然らば今若しこゝにおのづからにして  
四十四音一章の歌あらば、四十四音の歌にして

可なる也。おのづからにして五十二音一章の  
歌あらば、五十二音の歌にて可なる也。おのづ  
からにして六十二音の歌、おのづからにして七  
十六音の歌あらば、是も亦まさに可なるべき也。  
おのづからにして、或は甲、或は乙、或は丙、或は丁、  
乃至庚辛壬癸等の體の歌あらば、是亦當に不可  
無かるべきなり。おのづからにして百千種の  
内容あり、おのづからにして百千種の外形ある  
べきなり。我が邦の語をもて述ぶる短き歌、必  
ずしも十七音の歌のみならず、必ずしも三十一



音の歌のみならざるべき也。こゝに於て吾等の所謂短詩といふもの生まる。短詩は人々の欲するがまゝに形づくれる種々の短き歌を總べて指して云ふ名なり。

強ひるなかれ、強ひるはいつはる也。蛇は足無くして可なるなり、蟹は足多くして可なるなり、禽は二足にして可なるなり、獸は四足にして可なるなり、夔の一足なるも、瞿如の三足なるも、鶻の六足なるも、夔と嬰如と鶻、鶻とに在りては則ち可ならん。之を強ひて或は其の足を添へ

或は其の足を奪はんとするは非なり。馬手差を用ふべきときろに馬手差を用ひ、太刀を用ふべきところには、太刀を用ひんには、之を用ふる人も利を享くべく、太刀、馬手差も亦譽れあらん。鑢、薙刀の用ひらるべきところに強ひて太刀、馬手差を用ひんよりは、鑢、薙刀をもまた用ふべきなり。強ひること勿れ、強ひるはいつはるなり。葡萄酒は水を加ふべからず、味噌汁は濃きに過ぎしむべからず。桃の果の液多き、栗の實の水少き、味は皆其の一滴の水をも増す能はず、一滴

の水をも減ずる能はざるところにあるなり。  
 眼前の景、胸中の思、たまく歌となるべきもの  
 あるを覺ゆる時、強ひて必ずしも之を十七音の  
 歌となすべき所以は更に無きなり、又強ひて必  
 ず之れを三十一音の歌とすべき所以も無きな  
 り。又強ひてこれを漢詩となし、又強ひて之を  
 四十八音の今様歌、二十六音のうたひ物歌等と  
 なすべき所以も之有ること無きなり。ことに  
 於て吾等は人々の欲するがまゝにさまざまの  
 形を與へて短き歌を作ることよしとし、其の

短き歌のさまざまなるをば、總べて之を短詩と  
 は稱ふるなり。

十七音の歌の可なる時、十七音の歌を作るべし。  
 三十一音の歌の宜しき時、三十一音の歌を作る  
 べし。十七音の歌ともすべからず、三十一音の  
 歌ともすべからざるものにして、而もまことに  
 歌ならんもの世に少からんや、皆之を思ふがま  
 まに詠み出して短詩とすべき也。其の形は古  
 へに則るところ無しといへども、其の意、歌にし  
 て、其の言葉、調だに有らば、作る者は須賀宮に雲

猶未だ立たざりし前の歌の教を傳へ、枯枝に鳥の猶止まらざりし時の句の道を知れりといふべし。人は皆或る時は詩の人なり、歌の人なり。たゞよく自然に返り、形式を忘れ、思ふがまゝに詠み出でんには、まことに詩の道、歌の道に遠からずといふべし。

明治三十八年十二月

幸田露伴

詩の道

歌の道

短詩  
みをつくし

様式。一章四行、一行およそ四五音より二十音に至るまで、心のまゝたるべし。たゞし、言葉のつゞけかたに必ず調あるべし。

此は同人の研究の結果の假りの定めなれば、もとより深く泥むべきにあらず。心のまゝといへるところと、調あるべしといへるふところとに眼を著くべし。

言語。雅俗新古を問はず。外國語、術語、方言、隱

語等の類も、そを用ひておもしろからば、心の  
まゝたるべし。たゞし、調和を忘るべからず。  
文法。人々の之を信じ之を用ふるに任すべし。  
たゞし、古代中世近時、口語文法等の甚だしき  
混淆、又は全くの誤謬等より辭意の明らかな  
らぬを致すを忌む。  
方針。趣味に於ては、腐を去り、新を尙ひ、研究に  
於ては、偏狭自ら小にするを避け、寛容漸く大  
ならんを期すべし。

凡例

- 一 本巻載するところの詩の排列は専ら格調  
季節等の錯綜を旨とし、敢て詩の優劣良否に  
よつて順序を定めたるにあらず。
- 一 假名づかひは總て正しきに據ると雖も、調  
の上に於て特に發音に従ふを要するもの、喩  
へば『五百リョ』の『五百兩』に於ける、『ニシギ  
ヨ』の『人形』に於ける、『貫おか』の『貫はうか』  
に於けるが如きは、例外として發音に従ひた



は  
つ  
し  
ほ

り

一 送り假名法は從來定説無きに近し。本卷は別に前人の説によらず、たゞ常識により、極めて正しからんことを庶幾したり。

二

はつしほ

松は黒みて 更けたれど、  
花は明るき 宵の口。  
山門 おぼろ おぼろ夜の、  
石だゝみ路 雪踏 ちやらつく。

米光 關月

戀

大野 若狹

碌々<sup>ゴクゴク</sup>と 並んだ石の、  
 小春日の 心 ぬくきに、  
 ふと 潮<sup>ウシ</sup>せし 戀のおもひや、  
 かたくなの 相對し見る。

○

神谷 鶴伴

藁屋の軒端<sup>ノキバ</sup> たそがれて、  
 柳に曇る 夕月夜。  
 里の子供の 草履を投げて、  
 降るか照るか 明日を卜ふ。



短夜の 明け易くして、  
 朝潮の 磯に人なく、  
 島山の 松の梢に、  
 残る月 幽かなり。

齋藤 素影

人形

佐藤 露英

現身ワツシミ 消えて 土となり、  
 目鼻 かはゆき 人形ニシギヨとなりて、  
 われをば嫌ふ その人に  
 せめて 幾日イッヒを かしづかれたや。

湖邊

中谷 無涯

夕立雲の 崩れ流るゝ  
 湖上 船なく 松より暮れて、  
 眞菰 さらく 鷺一羽、  
 拳<sup>コブ</sup> つくりて しょんぼりと立つ。

戀の賛

巽 木雞

露や 宿る？ 尾花や 宿す？  
 花や うつる？ 水や うつす？  
 我や 思ふ？ 人や 思はず？  
 くすしきかなや、戀といふもの！

春怨

村田 琴伴

うたがひの雲 晴れやらぬ、  
春のおぼろの 夕月夜。  
おもひに瘦せて しよんぼりと  
一人行く路 櫻 散る。

夏日

公田 杳杳

沙白く 行く魚見ゆる 清き流を、  
われ下る 水のまにく 小舟浮べて。  
もさくと 岸邊に繁る 柳のさ枝、  
かき分けて 出でし里の子 色黒き哉。

歌

加藤 東風

詩神 いまさぬ ところなければ、  
 詩を試みぬ ものぞなき。  
 おぼろの田螺 クチゾウ 口吟み、  
 花散る雨に 蛙兒 カエルコ 謠ふ。

釣客

漆山 天童

身は輕し 一葉ヒトコの舟、  
 綸イは重し 巨口の魚。  
 世の塵の 此處に來らず、  
 波の上 おもひは淡し。

鸚鵡

大野 若狭  
 茅花野に 茅花拔きにと 人の行きて、  
 歸らぬ軒に 春雨の降る。  
 軒先の 籠の鸚鵡の つくり聲、  
 君よくくと いくたびも云ふ。



卯野木紫潮

身はおちぶれて 便船の  
 秋 頼みなき 風待ちや、  
 篷に雨さく 胴の間の  
 夜酒 冷たき 薄裕かな。

文化文政

齋藤 素影

文箱<sup>フダゴ</sup> 抱へて 駒下駄 穿いて、

柳の門を 駈け出る 禿。

袖も 袂も 春風の

花の彌生は 日も長さかな。

行々子

漆山 天童

行々子<sup>ギョウゾウシ</sup>、 行々子。

山雀<sup>ヤマザクラ</sup>の 藝も無く、 鶯の 經も讀まず、

唯 よしあしの 中にのみ居て、

かしがましくも 何をか語る 日がな一日。

深山の春

中谷 無涯

巖<sup>イハホ</sup> 千尺の 蘿かつら、  
 鉞<sup>コキ</sup>の音<sup>コ</sup> 絶えて 知更鳥<sup>コ</sup> 聲 冴ゆる  
 深山の奥に 春ありと、  
 落花 載せ來る 谷川の水。



米光 關月

落日の 影 長う、  
 帆船は過ぎて 海原 濶し、  
 磯蟹の ちよろく 歩み、  
 歩み去る 岩端<sup>イハノヘ</sup>、夜の色 逼る。

時鳥

卜部 観象

雨に暮れたる 兩岸の  
若葉の堤 たゞ 黒し。  
棹も危き 水の嵩、  
下る筏を 時鳥 鳴く。

○

神谷 鶴伴

菅の根の 永き春日を  
ひねもすに 雨の降り降る。  
踏<sup>フミ</sup>臼<sup>ウス</sup>の 音 たるくして、  
暮れにける 今日も静かに。



蛇籠の上に 酒樽 すゑて、  
 飲むや 夜振りの 頬かむり連。  
 月に興じて 夜の更けもせば、  
 河童に 網を さらはれやせむ。

齋藤 素影



米光 關月

夕立の 降らで過ぎ行く  
 一村<sup>ヒトムラ</sup> 暑き 物の匂<sup>ニホヒ</sup>や。  
 軒低きところ 馬盥<sup>バダラヒ</sup>の湯の 冷<sup>サ</sup>めて濁りて、  
 花咲ける葵 しづかに映る。



中谷 無涯

人に 見られず 知られず 生きて、  
 未練 悲しみ 無くて 死にたや。  
 亡骸<sup>ナキガタ</sup> 埋めし 跡ぞと示す  
 奥津城どころ しるしも無くて。



神谷 鶴伴

白雲<sup>シラクモ</sup>の 淡立<sup>アスミ</sup>つ山は、  
 甲斐が嶺<sup>子</sup>か、秩父の山か。  
 目をあぐれば 悠々たりや、  
 天<sup>ラシ</sup> 垂れて 鳥 低く飛ぶ。

初秋

靱山 東洲

夏も いつしか すぎの戸を  
推し明け見れば 月一痕、  
幾萬々の 星を率<sup>キ</sup>て  
秋 來にけりと 告ぐるなり。

乙巳春

巽 木雞

やをれ、その駒 曳き來<sup>コ</sup>、  
バイカルに 我 みづかはむ。  
いざや、その梅 折り來、  
西<sup>シ</sup>比<sup>ベ</sup>利<sup>リ</sup>亞<sup>ア</sup>に 我 さし植ゑむ。

水音に 短夜 更けつ、  
 庵イホ近く 水ミヅ雞ナ 鳴く時、  
 破れ窓に 月 傾きて、  
 燈火の 油 竭きぬる。

○  
 齋藤 素影

絶壁 高う 淵 深く、  
 材木 浮ぶ 二三本。  
 輪なりに 水の 泡 舞うて、  
 小雨に 今日も 暮るゝ谷川。

○  
 米光 關月



神谷 鶴伴

家 暮れて 煙 たなびき、  
 山 愁へて 小雨 そぼふる。  
 坂を下り 橋を渡りて、  
 藪蔭を 傘カサ 語り行く

神代卷雜詠

中谷 無涯

わたつみの 可ウマシ怜シテ小ハム濱マの、  
 桂井カッラキの 水底ミチノにある  
 妙美マツミの 虚空ソラ彦男ヒコヲを、  
 酌めども、 酌めども、 我は酌み得ず。

神代卷雜詠

中谷 無涯

迦具土の神、カグツチ 埴安の姫、ハニヤス  
 あひまして 産まし、御神 ウケモチ 保食の神。  
 たなつもの 御臍の中に、ミハツ  
 桑 蠶頭の上に。カヒコ イタダキ

山蒲桃

中谷 無涯

伊弉諾の 神の みかづら なりまし、イサナキ  
 山えびかつら 黒く熟ゆる。ヤマエビ  
 山路 い往かば 我 とり食まむ。ヤマヂ  
 黄泉醜女に よし あらずとも。ヨモツシメ

神代卷雜詠

中谷 無涯

背ソビラにイヌ磐ヒキ鞆マナヒヂ、タカトモ臂ヒに高タカ鞆トモ、  
 手タつかむヒツ梶ユミ弓、ハ羽ヤ々ヤ矢、カ鏑ラキ矢、  
 頭カフツチ槌ツルキのツルキ劔、フトゴシ太フ腰ゴシにハ佩ハき、  
 皇スメミマ孫ミマの、サキガケ先サキ駈ガケしケけむ、オホクメ大オホ來クメ目メの子コ等ラ。

神代卷雜詠

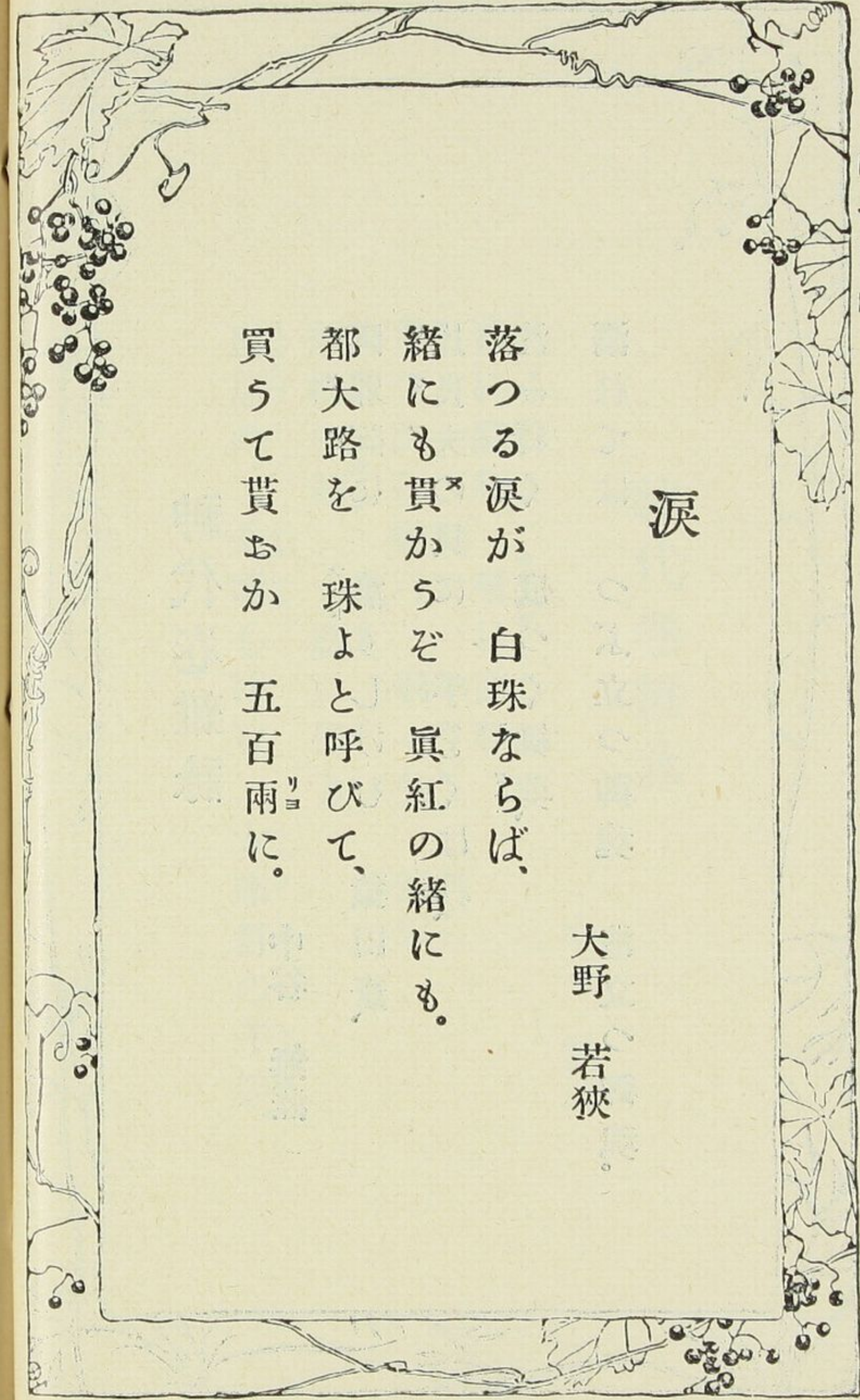
中谷 無涯

阿ア邪ザ訶カに、フナド漁フナドりしけむ、サ猿サ田タ彦彦、  
 比ヒ良ラ夫フのフ貝フに、ミ手ミをミくミはミれ、  
 沈シみシ行シく、ミ底ミつミくミ御ミ魂ミ、  
 溺ニれては、ミつミぶミ立ミつミ御ミ魂ミ、  
ミ泡ミ立ミつミ御ミ魂ミ。

涙

落つる涙が 白珠ならば、  
 緒にも貫かうぞ 真紅の緒にも。  
 都大路を 珠よと呼びて、  
 買うて貰おか 五百兩に。

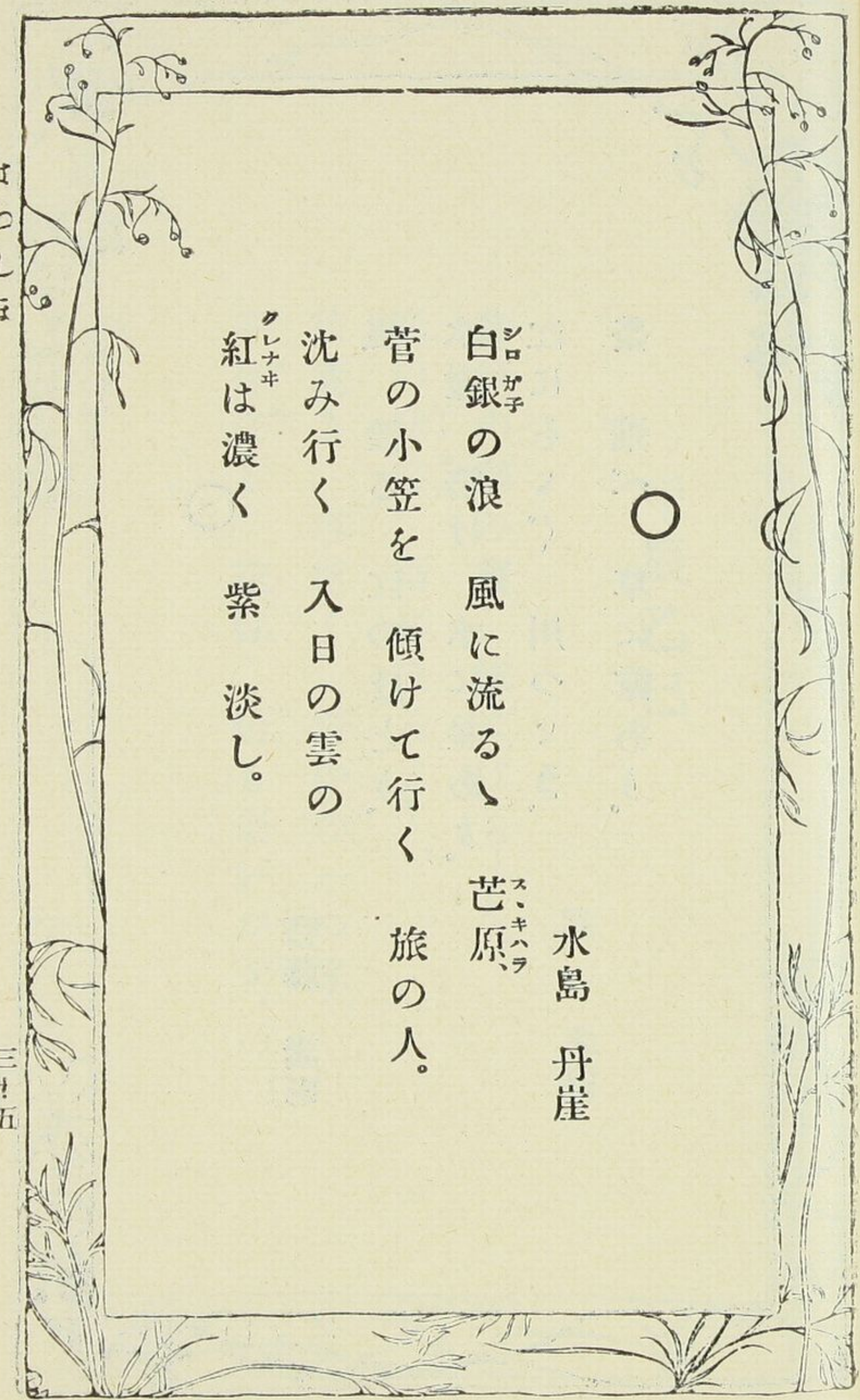
大野 若狭



○

白銀シロガネの浪 風に流るゝ 芒原ス、キハラ  
 菅の小笠を 傾けて行く 旅の人。  
 沈み行く 入日の雲の  
 紅クレナキは濃く 紫 淡し。

水島 丹崖





風 渡る 江のほとり、  
 水雞 鳴け 水に星あり。  
 江にそぐ 川つゞき、  
 螢 飛べ 草に露あり。

○  
 齋藤 素影

甲辰乙巳

巽 木雞

背戸の椎の實 風にばらく。  
 庭の棣棠 雨にほろく。  
 秋逝き 春逝く 野中の一つ家、  
 不在<sup>ル</sup>守<sup>モ</sup>る 花嫁 齡<sup>シ</sup>も老いたり。

春

小橋の普請 はかどらず、

米光 關月

菜の花盛り 曇る空。

昨日も眠い 音頭取、

今日もだるそな 槌の音。

大島 寶水

清水

旅人の 疲れしか、

大島 寶水

松の根方に 腰 かけて、

清水に 足を ひたしつゝ、

夕 逼り行く 山を眺むる。

かりそめの世に へばりつき、  
 いのち 大事と 迷ひまごつく  
 人の心のなんぞ いやしき、  
 雲 悠々と 空にあそぶに。

鈴木 雪哉



水車

神谷 鶴伴

蔦ツタ這ハふ小屋に 爺オヤ一人、  
 水車 かた〜 日は長し。  
 煙草に飽きて 煙管を投げて、  
 あつけらかんと 智慧の無い顔。

齋藤 素影

離れ屋の 青すだれ、  
 泉水の かきつばた。  
 美しき 女の子、  
 紅扇ベニアラキ 持つて出る。

夕暮

漆山 天童

明星 天に かゞやきて、  
 流の底に 影 沈む。  
 水際ミヅギに立つて おもひ凝らせば、  
 微かに来る 遠村の鐘。

山行

梅の木の 梢枯れて立つ  
裾野原 焼砂 炒られ、  
草いされ 空に 雲無く、  
風は たゞ 猿のをがせに。

中谷 無涯

清水

岩井の清水 掬ばんと、  
我 ふりはへて 訪ひ來れば、  
草にわすれし 扇あり、  
扇に繪あり 姫百合の花。

堀内 新泉

京の水

久保田 世音

水上<sup>ミツカミ</sup>は 早鮎 取り得て、  
白栲<sup>シロタク</sup>を 雪とぞ洒す。  
鳴川の 四條 五條、  
橋の下ゆく 白粉の水。

閨怨

大野 若狭

大君の 御言<sup>ミコトカシコ</sup>畏み 夷討<sup>エミシ</sup>ちにと、  
ゆきまし、 夫<sup>ツマ</sup>は歸らず 歸らぬもよし。  
大君の 御言のまゝに 夷討ちにと、  
ゆきまし、 この旅なれば 歸らぬもよし。

由緒ある 櫻の老木オキキ  
 咲き亂れたる 古寺フルデラの庭  
 階上 階下 花吹雪して、  
 堂内 深く 胡蝶 舞ひ入る。

齋藤 素影

西の大空 茜さして、  
 都の大路 闇はひろがる。  
 柳 静かに 暮るゝ夕、  
 いたづら童ワラベ 蝙蝠を打つ。

神谷 鶴伴

凍らんとして 凍らずに、  
 長き夜 咽ぶ 冬の川。  
 君にわかるゝ この廣き野の  
 野中の流れ 妾と見よ 君。

冬のわかれ

村田 琴伴

○  
 麥 黄ばむ。祖父は 鎌 磨ぐ。 巽 木雞  
 繭 熟す。孫娘 櫛 縫ふ。  
 麥 刈りながら 祖父 孫を思ひ、  
 絲 繰りながら 孫娘 人を戀ふ。



齋藤 素影

日は長し、門前 牛睡る岡、  
 花は散る、 簾外 野馬ヤバの立つ庭。  
 書に倦み 友を待つ、友は來らず、  
 蝴蝶 籬 越えて 去つて また 來る。

立秋

中谷 無涯

昨夜 星の 一夜ヒトヨの契り、  
 たまさかの 逢ふ瀬をかこち、  
 きぬくの 別れの涙  
 落ちて凝る 芋の葉毎に。

或る浦邊にて

米光 關月

赤禿山アカカゲヤマの 裾 長う、  
 入江は深き とろ風ナギや。  
 小雨コサメ ひとつく 空に 虹 立ち、  
 石切る音の 絶えく 響く。

山寺

佐藤 露英

溪流 奪つてめぐる 山門の朱アカ。  
 晴嵐 襲つて拂ふ 萬樹の緑ミドリ。  
 高塔 九輪 聳えて 夕陽傾きユフヒ、  
 鐘聲 答へぬ空ソラに 何をか告ぐる。

渡頭春

渡舟待つ間の 一二分。  
角ぐむ蘆の 三四寸。  
さゞ浪 寄する 川澱に、  
しづけく廻る 水すまし。

神谷 鶴伴



溪 深く 水 清く、  
釣橋に 若葉 逼る。  
鮎汲は 絶壁の下、  
菅笠の 豆ほどに見ゆ。

齋藤 素影

巽 木雞

梅散る門には 小猿曳、  
 桃咲く家には 伊勢神樂。  
 風もゆつたり 雨もしつとり、  
 ちらゝが里の 春の のどけさ。

田舎の夕涼

中谷 無涯

ふところに 金は無くとも、  
 行水の 裸百貫。  
 齒に寒き 瓜を噛りて、  
 十萬石の 風に吹かるゝ。

○

讀書に倦んで つくねんと。  
 何心なく たばこ 吹く。  
 書窓 いつしか 月出で、  
 疊の上に 雲烟を見る。

鈴木 雪哉

宮島

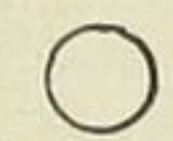
米光 關月

湖の光 星明り、  
 島山 黒く 夜は更けて、  
 消えく 残る 燈籠の  
 二つ 又 三つ 消えて行く。

雲の峯の畫に題す

加藤 東風

おりくと 砂に照る日、  
こつくと 鑿打つ石工、  
破れ土瓶 若葉の蔭に、  
ゆるく立つ 煙草の烟。



神谷 鶴伴

往昔 長者が 屋敷跡、  
かたみに残る 古榎樹、  
晝 暗うして 蝙蝠の飛び、  
築地は潰えて 茅花 花咲く。

紫陽花の賛

漆山 天童

緑濃き 木下蔭 紫陽花の 花一朶。

昨日は白く 今日にはむらさき。

日に 日に 色の 變りくくて、

花無き庭の 夏を飾れる。

○

朝立の 旅人二人

齋藤 素影

磯路 行く 菅の小笠や。

松風に 薄霧 晴れて、

海原に 物もなき秋。

水島 丹崖

語る野崎に お染のやうな  
 女大夫の 口紅 とけて、  
 春の夜 更けし 絃イの音、  
 戸外ソにや しとく 雨が降る。

牝鶏

大野 若狭

夏の朝 すゞしきに、  
 鳥屋トヤを出し 牝鶏メトリの  
 羽色 あせ 瘦せは見ゆれど、  
 翼の下に 雛ヒナ 九つ。



### 山里

米光 關月

ぬる茶に 酔ひの 醒め心地、  
 窓の障子を そと 明けりや、  
 山吹 散るか 崖の山吹。  
 小雨 そぼ降る 春の夕暮。

### 織女

中谷 無涯

梭の音 月に冴え、  
 織女ハタオリの 歌に泣く。  
 蟲の聲 身にぞしむ。  
 故郷ふるさとの 父よ 母よ。

公田 杳杳

はてし 知られぬ 青海原を、  
 離れ小舟に たゞ 一人 漂ふ。  
 山だに見えず、鳥だに飛ばず、  
 風 さわくと 我が袂を拂ふ。

清水

齋藤 素影

日は照る、蟬鳴く、箱根山。  
 風無し、蟲飛ぶ、草いされ。  
 我 馬子に問ふ 清水ある處  
 馬子は指さす 松深き溪。

石のきざはし 高さ百尺、  
 人 見えずして 落葉がさつく。  
 傾く鳥居、傾ける扁額、  
 荒れたる社 たゞ 秋の風。

神谷 鶴伴



偶成

大野 若狭

棒鱈<sup>ボウダラ</sup>の 都に入りて、  
 からびたる 腸 ひろげ、  
 ひたぶるに 春にさらせど、  
 あはれ 血は 湧かて止みにき。

齋藤 素影

櫻の社 酒盛の  
 席は 静かに 西日して、  
 額 汗ばむ 舞姫の  
 舞の扇に 花 散りかゝる。

清水

倉本 春眠

老樹<sup>オキキ</sup>の葉漏る 暑き日ざしに、  
 慣れぬ山路を 喘ぎ迎れば、  
 谷間 遙かに 翡翠<sup>カハセミ</sup> 啼いて、  
 塗椀 動き 清水 溢るゝ。

笠雲の 峯より崩れ、  
 落ちかゝる 麓の本立、  
 雨 包む 裾野十里を、  
 片晴れ 暫し 愛鷹アヅカガの山。

中谷 無涯



柳の蔭に 篝を焚きて、  
 漁夫リシ 獲物を 誇るかたはら。  
 月に 舟 漕ぐ 裸兒ハダカゴの  
 笛もとどかず 淵 深くして。

齋藤 素影

百合

大野 若狭

ほのくらしき 夏山蔭の  
 水澤邊の 白百合の花。  
 かたげたる 頭カシラ 重たく、  
 おのが香の 強さに酔ふや。

秋感

神谷 鶴伴

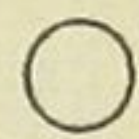
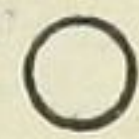
蟹 肥えて 秋 次第に 高く、  
 山 瘦せて 霜 漸く 滋し。  
 衣キヌは薄し、よく 貧に慣れたり。  
 酒は旨し、かつ 獨り樂む。

百舌の鳴く  
 蜻蛉 飛ぶ  
 岡の上 虹 立つて、  
 秋の日の かつと照る。

柿カキ島シマ

稲イナムシロ筵シロ

齋藤 素影



米光 關月

空は疲ツカれて 花ぐもり、  
 葎ヨシバ簣バネに 長い 日を巻けば、  
 かさこそ 逃げる 竹の皮、  
 鐘に 柳の 覺めて 吹かるゝ。

童話

大野 若狭

近江の湖 よべに鑿ちて  
 富士の山 あしたに造り、  
 その畚モッコ はたきて成れる  
 函根路の 二子二山。

老鶯

中谷 無涯

老鶯の 雛 連れて、  
 しわがれし 聲に鳴く、  
 熊蕨クマワラビ 生ひ茂り、  
 澤塞サハフサギ 咲ける 木蔭に。



春風ハルノカゼ 一路 翠スズナなす  
 柳ヤナギの蔭かげに 槩ホキ 執とりて  
 駒ウマに 水みづかふ 若わか武者ムシの  
 鎧よろいの袖そでに 戯あそぶ蝶ちょう。

齋藤 素影



酔よひは醒さめず 東風コトカゼ 静しずかにて。  
 歌うたは濕ぬらず 日影ひかげ ぬるうて。  
 吳ゴ姫キ 遊あそべ 越エツ女メ 訪まへ、  
 大和ヤマトは 花はなの 多おほき國くになり。

巽 木雞

### 中川

漆山 天童

長橋<sup>チャウケウ</sup> いたづらにかゝりて 行人 稀に、  
 蘆の葉隠れ 行々子鳴く。  
 川船 ゆるく來りて 水は激せず。  
 かる鴨 飛んで過ぐ 夏雲<sup>ナツクモ</sup>の前。

### 初夏

佐藤 露英

若葉に 堤 たそがれて、  
 渡舟<sup>ワダシ</sup>に 人の 影 淡し。  
 今年も過ぎぬ 隅田の春、  
 成らぬ詩歌<sup>シイカ</sup>に 身は老いて。

初秋

齋藤 素影

宵 稻妻の 星 稀にして、  
 今朝 川霧の 人を吹く。  
 梁 幸多し、落つる香魚の  
 腹 黄なるあり、秋 立ちぬらし。

若き尼

村田 琴伴

昨日の春の 夢 さめて、  
 櫻に渡る 青嵐。  
 むかしをしのぶ 墨染の  
 夕の空に ほととぎす 鳴く。

○

星 見え初むる 夕間暮、  
 岸に 茨ワスラの花 ほの白し。  
 漕ぎ行く舟は 繁みを出でつ  
 蚊に飛ぶ魚に 人 網を打つ。

齋藤 素影

山家の秋

米光 關月

栗拾ふ兒の 友を呼ぶ  
 聲は淋しく 谷に消え、  
 萱のざわつき 日はあかくくと  
 一本杉ヒトモトスギの 影 長うくスベ迂る。

○

踏まれた小草 また 起きて  
春の やさしき 日に匂ふ。  
光 のどけき 水田の上を  
風に引かれて 燕 飛び交ふ。

公田 杳杳

蜘蛛の圍

中谷 無涯

昨夜<sup>ヨ</sup> 星の 宴<sup>ウツガ</sup>の寶衣<sup>コロモ</sup>  
落ちて 我が 軒に懸るか。  
霧 きらふ 今朝 起き見れば、  
眞珠<sup>マ</sup> 飾る レース 三つ四つ。

清水

巽の木雞

暑い日ざかり 柳の蔭を  
 くりり出でたる 馬方三次。  
 菅笠 脊負ひて 歌ふ一節、  
 聲は 清水に 濕れて居る。



齋藤 素影

雨の櫻の 門に別れて、  
 柳の土手を じつと 見送る。  
 橋のこなたで いま一たびも、  
 蛇の目の傘の こちら 向かずや。

裾野

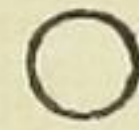
裾野十里の草の露

大野 若狭

鈴ころくと響かして

夢を載せ行く 輕尻カサシの

歌より 峯の雲の分るゝ。



齋藤 素影

霧深き溪 水の音、

雲白き峯 松 高し。

目白は 麓の 杉に鳴きて、

芒の野末 月 残るなり。

夏の夕

神谷 鶴伴

木の葉 そよぎて 風 なまぬるく、  
雨を含みて 雲足 早し。  
庭の隅から 蟬ヒキはのそ〜、  
池 たそがれて 鯉はねる音。

○

齋藤 素影

行く春や 麥 青くして、  
麥鶉 啼き去る 彼方。  
畑打ちに 會釋して行く  
日傘 繪日傘 二人連。



雲漏る 夕日 薄く流れて、  
 庭に 雨 乾ず、小<sup>チ</sup>簾<sup>ス</sup>に 風 無し。  
 瑠璃の大鉢、金屏の前、  
 牡丹 崩るゝ 音の 静けさ。

吉田 汀蘭



### 山莊

荒木 櫻洲

柴の戸 叩き 訪ふは誰<sup>タ</sup>ぞ、  
 吾が詩の友か 碁敵か。  
 宵闇月の空 暗く、  
 風 吹いて 木の葉 飛ぶ。

大野 若狭

仰げば 高さ 鰐口の  
 鏽口サビグチ あいて 秋を吞む。  
 腹を 組緒に 叩かれて、  
 があんくと 空音ソラネ たてたる。

漆山 天童

棚に書フミあり 讀むに懶く、  
 床に琴あり 弾くにもものうし。  
 唯 つくねんと 椽側に居て、  
 門田に立てる 鶺鴒セウリをながむる。

山吹

大野 若狭

井手の流の 温ヌグときを  
我が物貌に 口あきし  
蛙の面の みにくさに、  
散りてかゝりぬ 山吹の花。

紅蕉花

中谷 無涯

日脚 傾く 窓かげに、  
リボン ゆらめく 籐の寝臺、  
袖に 風ある 中形の  
浴衣ユカマに うつる 紅蕉ゲンゴウの花。

山を罩め 野を罩むる

夢の如 淡き靄

露 滋くして 里の灯 疎ら

墨繪 乾かぬ 夏の月の夜

松岡 夢鳥



大野 若狭

水をわたる 風 ほの白く

赤いとんぼの つい〜ととぶ

秋の野 遠く 物を思へば

西へめぐると 日かげの小き

時事雑詠

中谷 無涯

日比谷に立ちし 火の柱、  
 敲き散らせし 火埃ヒホコの、  
 八百八町 舞ひて狂ひて、  
 都を 野分 夜もすがら 吹く。



神谷 鶴伴

くたびれて 宿 借れば、  
 合チ歡ム木の花 葵屋の背戸に。  
 湯上りに 端居をすれば、  
 檐のつま 蚊が 餅を搗く。

軍國

婆は死にけり 暮の秋、

爺 一人 住む 野の小家、

孫の遺骨に あげる栗飯、

人 訪ひ寄れど 耳は聾ひたり。

齋藤 素影

春の宵

波は 音なく 月 乗せて、

箱根 足柄 朧なり。

深編笠の 大磯通ひ、

小袖に 桃の 花の ひらく。

加藤 東風

桔槔

大野 若狭

今日 閑なるや はねつるべ、  
底にかゝりし 花片に、  
平たき心 動かして、  
深井の戀に うなね 曲げたる。

山行

中谷 無涯

玄くくと 落葉の朽つる  
べにしだの 岩肩 かざる  
岩間みち 行く 袖のあたり、  
むらさきの 岩菜 花咲く。

谷 寂々と 鳩の聲、  
 雨にやならん 峯の雲。  
 さめぬ晝寐に 杉 暮れて、  
 夢の續きの 岩藤 長し。

○  
 米光 關月

繪葉書に

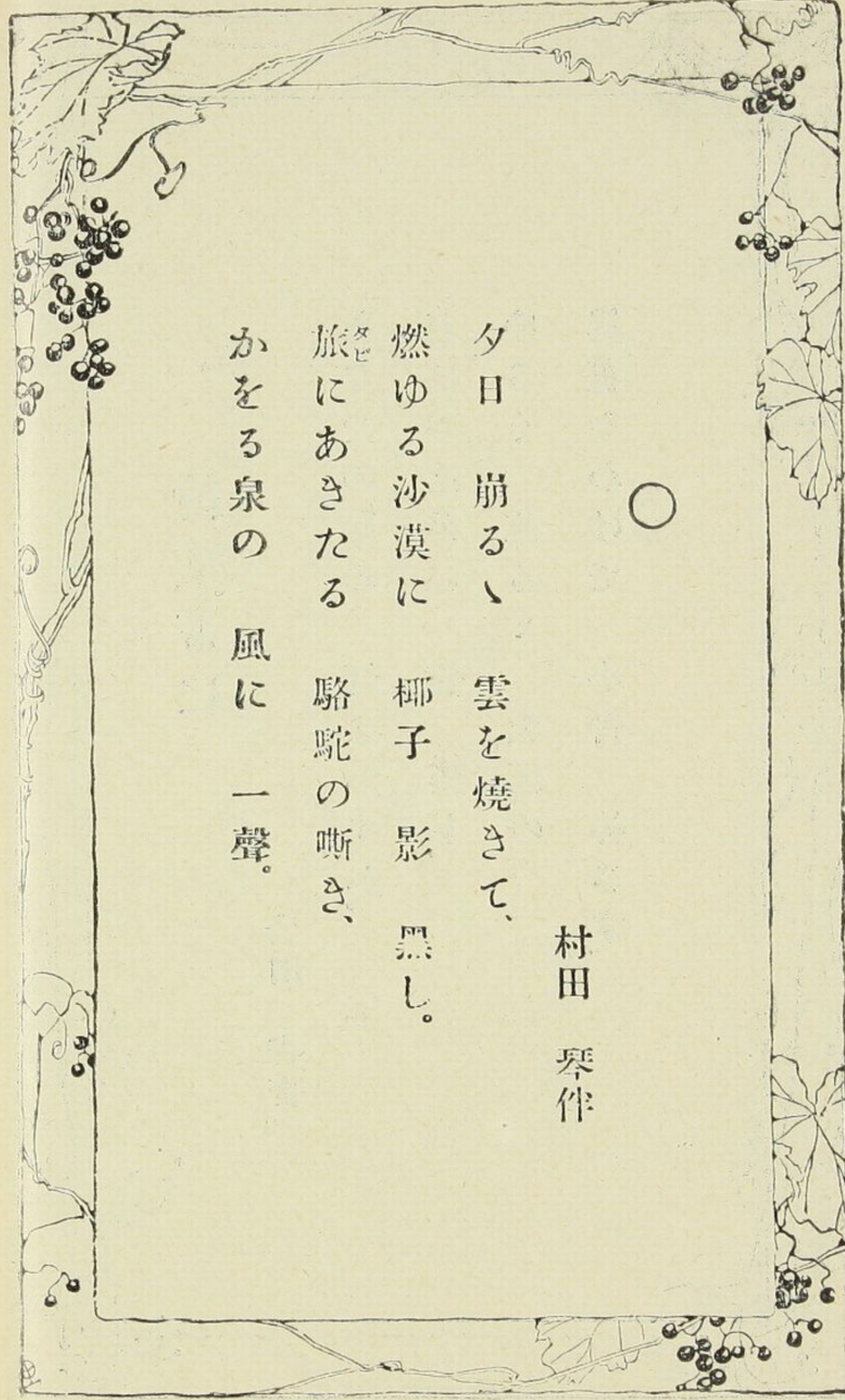
公田 杳杳

あなたの岸の 灯はかすか。  
 月はおぼろに 靄 淡し。  
 ゆるく 流るゝ 大江の  
 眞菰をわけて 小舟 棹さす。



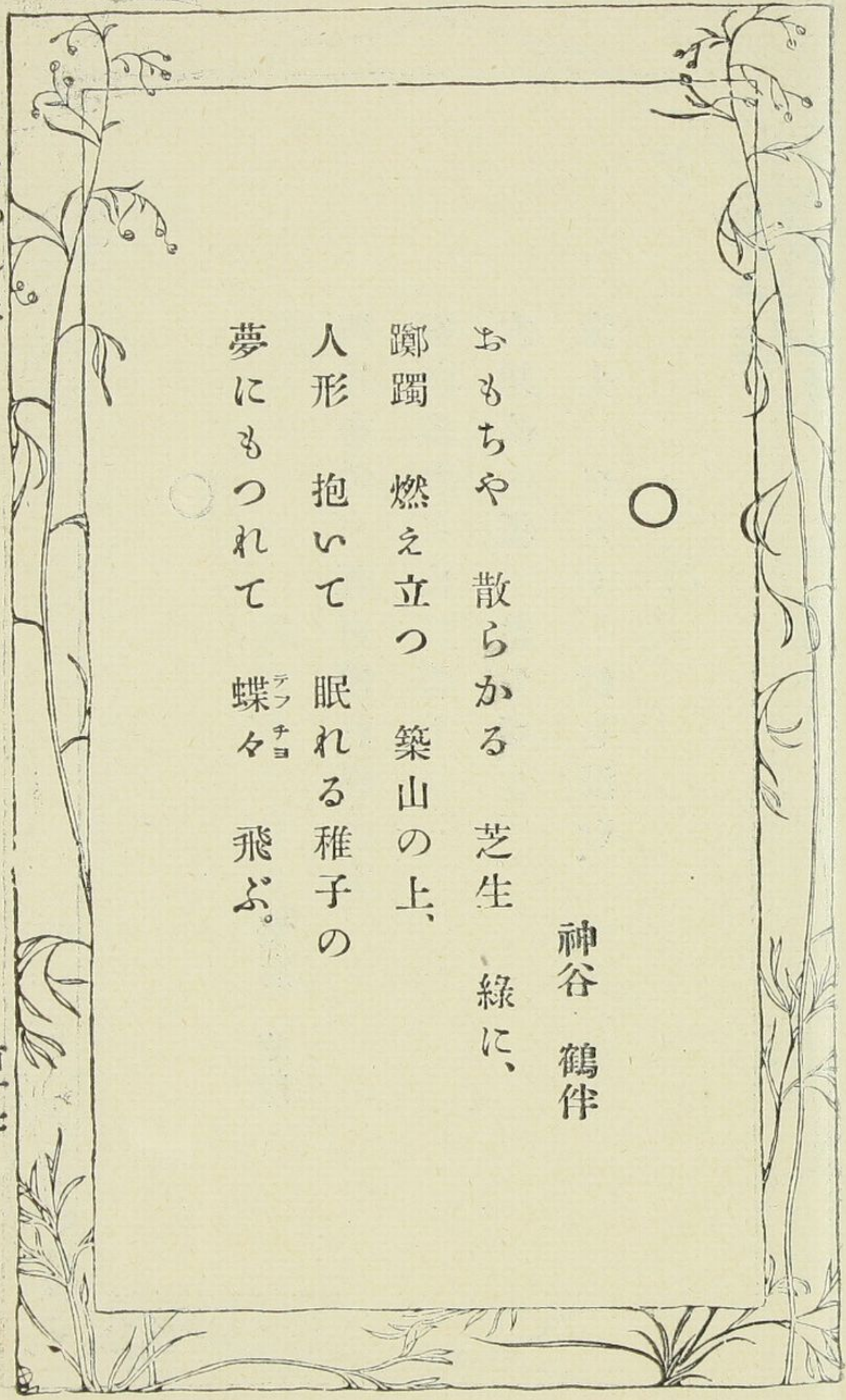
夕日 崩るゝ 雲を焼きて、  
 燃ゆる沙漠に 椰子 影 黒し。  
 旅にあきたる 駱駝の嘶き、  
 かをる泉の 風に 一聲。

村田 琴伴



神谷 鶴伴

おもちや 散らかる 芝生 緑に、  
 躑躅 燃え立つ 築山の上、  
 人形 抱いて 眠れる稚子の  
 夢にもつれて 蝶々 飛ぶ。



○  
 明け方の 五月晴れ、  
 雲 動き 山 青し。  
 大川は 橋 落ちて、  
 漁夫 ひとり 鮎を汲む。

齋藤 素影

初秋

小萩の花の 蔭 映る  
 井堰に漁る 里の子や。  
 ほろりと 散りし 柳の葉、  
 筧イカキに入りて 秋は立ちけり。

大高 醉子

清水

米光 關月

天より下す 涼風の、  
松にかゝりて 其處に聲あり、  
聲ある松の 地に幸を呼ぶ、  
その岩が根に 湧くや 眞清水。



神谷 鶴伴

子等 去りて 波に漂ふ  
古池の 笹舟一つ、  
落花を載せて 春風 軽く、  
浮藻が島に 今 寄らんとす。

夕日 脊負ひて 雁 渡る  
 刈田に續く 暇道、  
 くたびれ足の 角兵衛の  
 獅子の雞毛に 秋の風 吹く。

中谷 無涯

春の水

笠間 醉雨

春の水 ゆるくくも  
 霞を溶いて 流れくくつ、  
 烟る柳の 岸を撫づれば、  
 白鷺 睡る 夢も安らに。

楨の戸 たしく 小夜時雨  
 聞けば 落葉も 交るやら。  
 おもひに更くる 燈火の  
 影さへ細る 一人住み。

○  
 植谷 鉦

百合

大野 若狭

夏山に 百合 折りて  
 作りたる 花束や、  
 ねふりを誘ふ 木下風  
 すとしき石に 忘れたり。

夜泊

遅塚 麗水

蘆に泊り、蘆を焚き、  
月に汲み、月を煎る。  
半夜 詩 成りて ひとり 歌へば、  
魚も出て聴く 大江の心。

凌霄花

神谷 鶴伴

三日月の影 淡く、  
凌霄花の花 黒む、  
夏の夜の 人 寐ねがてに、  
子等は騒ぐ 門前の橋。

雛祭

加藤 東風

小 さ さ 雪洞 ボンボリ 金屏風、  
 數の御道具 蒔繪 輝やく、  
 白酒の酔ひ 春 温ヌグうして、  
 膳の榮螺に 桃の花 散る。

秋雨

大島 寶水

秋雨に 傘 借りて、  
 柳散る門 我 行けば、  
 美しき子の つと 出でて来て、  
 袂 つかんで 我に寄り添ふ。

隅田の流 黒うして、  
 今戸へわたす 舟 のろく、  
 畏まりたる 筑波 小きに、  
 櫻の落葉 ひらくと舞ふ。

大野 若狭



眠猫

中谷 無涯

小春日の ぬくとき光  
 切り張りの 障子にさして、  
 すぎる 飛ぶ 耳をふるひつ、  
 椽に まるく 小猫は眠る。



○  
 秋の氣 滿つる 空 澄みて、  
 小川 三尺 水 清し。  
 無心の少女 佇めば、  
 流に溶くる 帯のくれなる。  
 笕  
 流水

五月雨

大野 若狭

我妹<sup>ワケモ</sup>子<sup>コ</sup>が ねくたれ髪の  
 ねくたれて 解くに解かれず  
 黒髪の 長さをわびて  
 うらむに 似たる さみだれの雨。

秋は老いたり 空の色、  
 露 しとゞ置く 草の上、  
 夕暮 風の ざわつきで、  
 唐黍モロコシの殻 からくと鳴る。

神谷 鶴伴

夜泊

大島 寶水

星の色 すみわたり、  
 潮ウシホの光 夜は更けぬ。  
 垣立カキツツに 灯のもりて、  
 夜泊の舟に 賭博バクチうつ見ゆ。

遊米雜吟

田村 松魚

金髪 ゆらぐ 海の風、  
 裸躰の女神 木蔭に臥す。  
 よし 我 繪師の たくみ まねんと、  
 沙に畫けば 波 さらひ行く。

秋郊

中谷 無涯

榛の樹の かげ 長く、  
 落日に 雲 染まる。  
 渡鳥 一群 過ぎて、  
 尾花 たゞ 佗しく 靡く。

木内 舒芳

雲 低うして 風 亂れ、  
 雨 すさまじく 芭蕉に打てど、  
 ひろき葉うらを 我が物がほに、  
 でてむし ひとり 雨やどりする。



案山子

笠間 醉雨

弓 持てる 案山子 甲斐なく、  
 秋風に 其の弦 切れぬ。  
 稻雀 群れて 來りて、  
 人の計畫タケミの 愚を笑ふ哉。

暮秋

物集 梧水

すがれし萩に 小雨 はらつき、  
白き胡蝶の 羽袖 やぶれて、  
羽袖のいろの 夕雲 淡く、  
唯 蕭條と 秋ぞ暮れぬる。

残花

篁 流水

散らば 疾くく 皆 散れ 櫻、  
色褪め 残る 葉がくれの花、  
見るも憂し 思ふもつらし、  
秘めて 語らで 老いし戀の身。

秋の初めに

中谷 無涯

翼に 夏を のせてゆく  
燕が 旅の 波の上、  
見送る 杉の 梢ツラ 高く、  
秋を誇りて 鴟ツルが鳴く。

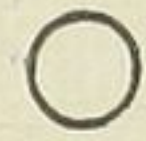
天王祭

村田 琴伴

御輿 洗ふ 肘笠雨に  
たゆたふや 天王祭。  
紅 にじむ 花傘の下、  
町の娘が 雲切れを待つ。

黍の葉がくれ  
 三日月 落ち、  
 糠星の空 雁 低く飛ぶ。  
 蘇秦の家には 箴の音して、  
 人 打ち語る ともしびの影。

齋藤 素影



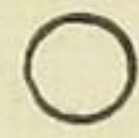
大野 若狭

狩くらの 行<sup>カ</sup>藤<sup>キ</sup>の  
 豹の斑の 鮮やかに。  
 濡れてしなへる 山吹の  
 ふゝめる花の 姿 よろしも。

夜泊

米光 關月

霧の夢路を 今 出てし  
入江に泊てし いざり船。  
朝風 冷えて 月 白き秋、  
ぎらつく釜に 米を研ぐなり。



大野 若狭

武藏野の 薄 老いては、  
婆々が手に ふくろふとなり、  
雑司が谷の 森のほとりに、  
ピードロの 眼 光らす。



夜の神 文色を掩うて、  
現世の 物の息 やむ。  
こだま 今 時を得て、  
空に散る 葉の音 寒し。



ト部 観象

四手網

入日に揚ぐる 白魚網、  
ルビー サファイヤの 玉の露 散る。  
さもあらばあれ、花の化りたる  
白魚に愧ぢよ、網は古りたり。

天野 會心

雀の子

標子<sup>レンツ</sup> 白み、雀子 噪ぐ。  
仕掛けし米の 水加減。  
箒の残りを はたくと  
庭に蒔きやる 若き妻。

高橋 千鳥

遊女を哀しむ

曲欄に 酔ひを吹かせて、  
艶容<sup>アスガタ</sup> 月も薫ばし。  
青葉 洩る 燈火 碎く  
池の鯉 あはれ 誰が身ぞ、

卜部 観象

○

神谷 鶴伴

晝寝の顔に 蠅 二つ三つ  
 夢に動かす 澁團扇  
 軒端に吊りし 籠の蟋蟀ギス  
 風のまに〜 揺られては鳴く。

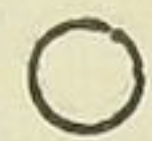
詩狂

松岡 夢鳥

戀には痩せて 詩に痩せて、  
 想ひ 亂るゝ 秋の暮、  
 筆を折りて 庭に 抛てば、  
 露に聲あり 萩の枝。

東風に 晝簾 揺らぎて、  
つばくらめ 庭を横ぎる。  
椽の日に 猫 長く寝て、  
海棠の ほろりと散れる。

天野 會心



有明の月 光 うすらぎ、  
常夜の社燈 影 幽かなり。  
廣前 寂びて 人もなき山、  
一聲 鳥鳴いて 椿 花落つ。

公田 杳杳

春の海

油風<sup>アブラマン</sup> 吹く 春の曙  
 霞の裡に 舟をとめて、  
 櫻鯛 釣る 海は静けく、  
 一升の徳利 振るに音なし。

村田 琴伴

神谷 鶴伴

○  
 頬杖を つくくと  
 物思ふ 机の上の  
 薄黒き ランプの笠に  
 衰へし 秋の蚊や。

物集 梧水

○

冬の野川の 暮れて 悲しく、  
 風 颯として 白茅チガキ わななく。  
 蒼穹 高く 星座 燦爛、  
 闇に沁み入る。潺湲の音。

凱旋

高橋 千鳥

妻は 涙の 嬉し泣き、  
 子は 可愛らし 人見しり、  
 胡地陣中の 樂しき夢を、  
 今 目のあたり 繰り返す夫。ツツ

夢

秋の日のぬくきに酔うて、  
 葉がくれの真晝の夢を  
 覺まされて 木通の口や、  
 接吻の 蜂や 戀しき？

中谷 無涯



齋藤 素影

大雪 晴れて 静かなる庵、  
 障子に しばし 夕日のさせば、  
 松に来てゐる 饑ゑし鴉が、  
 さら／＼ 落す 雪の影する。

岸頭感

倉本 春眠

高下駄に 砂濱ありく 世ももどかしく、  
 潮さるに 漂ふ泡の 身も腑甲斐なや。  
 ととも 絶たれぬ 二人が情緒、  
 捨て捨てん この身 現世。

秋の蝶

佐藤 露英

舞の衣を 風 破り、  
 化粧の面を 雨 打てど、  
 ゆふべの床の 紅菊に、  
 蝶は淋しく 夢をたどれる。



夕焼け雲の 華やかに、  
 落葉 息つく 一しきり。  
 電柱 並ぶ 土手 弓なりに 長う、  
 富士 高々と 野末 はるけし。

米光 關月

霞 こんく 小路 しぐれて、  
 蛇の目を滑る 眞珠 はらく。  
 角の蕎麥屋の 燈火<sup>アカリ</sup> またゝき、  
 湯歸り路に 手拭 凍る。

村田 琴伴

一本杉

天野 會心

村 榮えしを 出水 流しぬ、  
 茅 茂りしを 野火 焼きたりと、  
 雷火に殺げし 痕 黒き  
 野中の一本杉 我に語れり。

○

木内 舒芳

鬢搔く小櫛の つと それで、  
 雪の腕を すべる たもとの  
 夕風 扇る 模様 涼しき  
 夕顔の 花に 月 淡く照る。

田園雜興

神谷 鶴伴

夕日 うすれて 雲 淡く、  
破れし案山子に 風 渡る。  
蝨追ふ子の 頭アタマの上を、  
赤蜻蛉の 群れて 飛び交ふ。

○

中野 采蘭

睡蓮を 蜻蛉カマボロ それて、  
さゞれ浪 紫 匂ふ。  
井オリンも 弾くにもものうく、  
姫君の たゞ 庭を見る。

夜泊

中谷 無涯

玄海 荒れて 船 出でず  
 釜山の泊り アラランの  
 哀音 うつら うたゝ寝の  
 夢を乗せ行く 棧舫サンボウの水手カコ

熊谷 太愚

山々の影 黒みくゝて、  
 隈もなき月 我 一人 見る。  
 厨房クハ 酒あり 酔サカひを惹くべく、  
 庵 客なし 蟋蟀 来る。

加藤 東風

朧に酔ひて 花に田を賣り、  
 一夜 蛙に 恨み鳴かれき。  
 月のこの秋 山 買へば、  
 直段の外に 女郎花 咲く。



寺門

中谷 無涯

黄ばむ 公孫樹の 幹は七尋、  
 垂るゝ乳瘤チコメ 子持ち女メに似て。  
 金紋 猶 ひかる 山門の棟、  
 白鳩 三羽 はたくと飛ぶ。

薪タキに伐られ 炭に焼かれて、  
 切り株 白く 山 浅くなる。  
 浅さも よしや 今日 春雨に、  
 炭竈のけぶり 姿 おもしろ。

天野 會心

深海フカミの戀に まつはりし  
 花藻 幾尺 たぐられて、  
 潮を出てし つれなさや、  
 秋 戸によりて 雲のゆく 見る。

大野 若狭

木曾驟雨

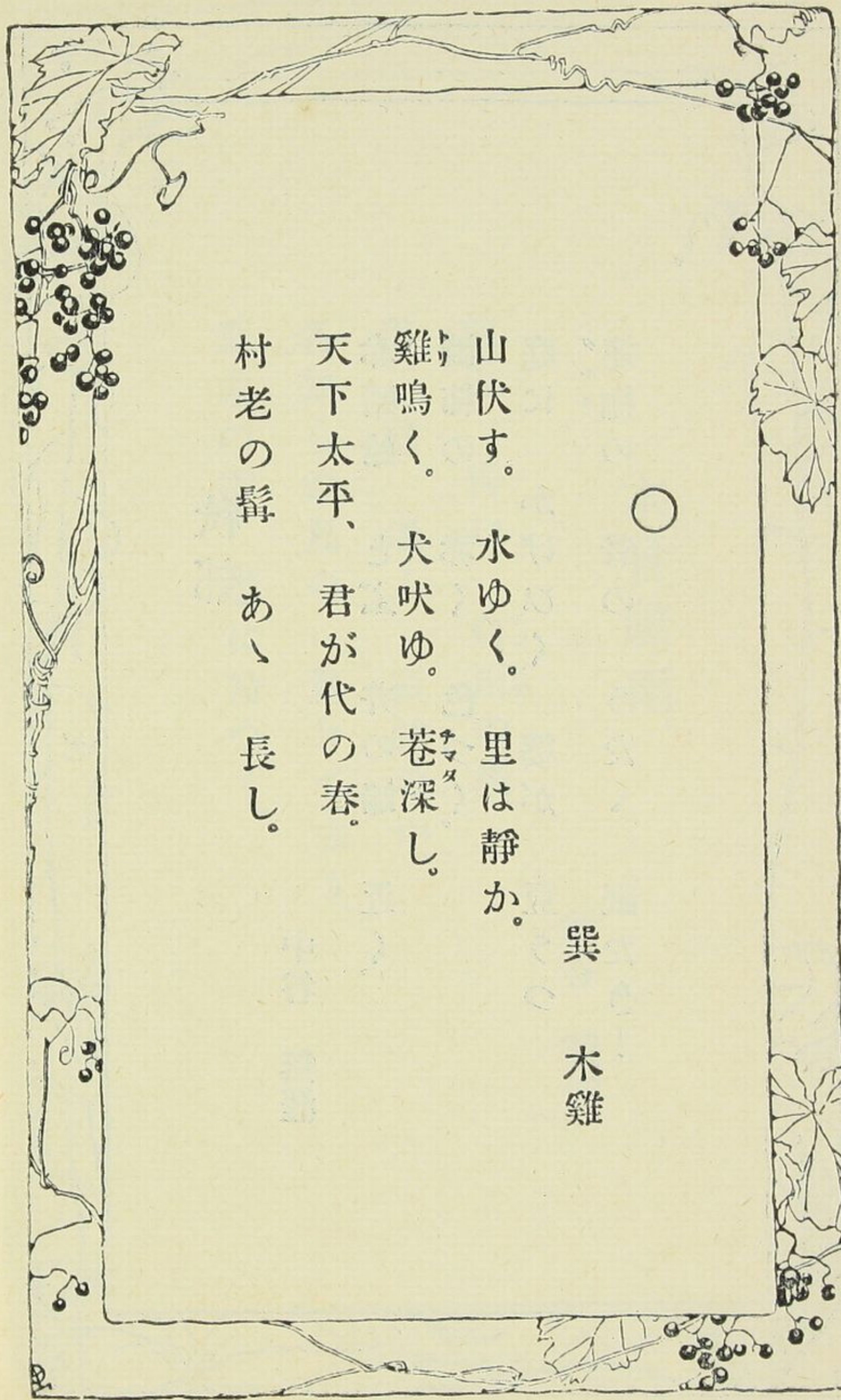
神谷 鶴伴

前山 青む 白雨ユラダチの後、  
雲 猶 迷ふ 密林の中、  
名知らぬ鳥の 驚きて去り、  
葉末の雫 襟に冷つく。

秋郊

中谷 無涯

赤蜻蛉 とぶ 井の端 近く、  
澁柿の 赤く 色づく。  
庭に かげひく 婆が 豆うつ  
連枷ツルリの 音の うたゝ 眠たさ！



山伏す。水ゆく。里は静か。  
 雞鳴く。犬吠ゆ。巷チマダ深し。  
 天下太平、君が代の春。  
 村老の髯 あゝ長し。

巽 木雞

明治卅八年十二月廿二日印刷  
 同 年十二月廿六日發行

實價金四拾錢

編輯者

右代表者

最好

神谷 徳太郎

東京市京橋區中橋和泉町五番地

佐藤 助治

東京市京橋區西船屋町廿六七番地

佐久間 衡治

東京市東橋區中橋和泉町五番地

泰山 堂

東京市京橋區西船屋町廿六七番地

株式會社 秀英 舍

印刷所

發行所

印刷者

發行者





編輯主任  
薄田斬雲

# 小品文學

每月一回  
一日發行

◎『小品文學』は小品を主とする純文藝雜誌なり

◎本誌は諸大家に起草を乞ひ小品、短文に一生面を开拓するを期す。

小品欄 には毎號諸大家の創作にかゝる小品及び歐米諸大家の小品翻譯等數篇を掲ぐ。

雜纂欄 には諸大家の雜錄、紀行、短文等、凡て精鍊簡潔の筆に成れる珠玉を連ねて江湖の豫望に背かざらんを期す。

文苑欄 には諸大家の錦心繡腸を綴り成せる新體詩、美文幾篇を飾りて滿天下を眩耀するものあらん。

時文欄 には主として小品文學の特質及び價值を探明し、併せて當今文壇の氣運傾向の推移を叙し、猶ほ隨時諸種の作品に就いて紹介評論する所あるべし。

譚叢欄 には社會各部諸名家の談話及び其が居常逸事奇聞等を叙し讀者をして身親しく其境に臨んで其の風丰に接するの思ひあらしむべし。

短文欄 には何等形式の制約無くして何等か照應、格調の美を備へたる短文、若くは鋭鋒肺腑を刺すの警句、或は天來の奇想等を採録して天下の耳目を聳動せんを期す。(此欄には廣く讀者の投稿を歓迎す。)

時報欄 には文壇消息及び社會各方面に涉れる文學的觀察記を載せ居ながらにして社會の變遷と流行の推移とを知るの便ありしむ。

繪畫 木版、寫真版等數十種隨所記事と照應せるものを挿入して一層の感興を添へんを期す。

定價 一册前金拾五錢 六册前金八十錢 郵送料 壹錢、六錢 合計金 拾六錢、九拾三錢  
七錢 十二册前金壹圓六拾八錢 郵送料 拾二錢 合計金 壹圓八拾錢

(切手代用は一割増の事) (廣告原稿×切毎月十五日)

## 發行所

東京市京橋區  
中橋和泉町五

## 泰山堂

